

自由民権運動の秩父事件について

島口 健次

自由民権運動の中に、秩父事件がある。秩父事件の発端は農家の負債問題であった。秩父地方は江戸時代以来、養蚕、製糸業が盛んであったが、特に幕末開港後は、生糸が輸出品となったことにより、活況を呈していた。ところが1881年（明治14）以降の松方デフレによって生糸価格は急落し、養蚕等に依存して生計を立ててきた秩父地方の農民の生活は危機に直面する。土地を抵当に高利貸しに対して多額の借金を負うものが続出した。

1883年（明治16）、秩父地方では免債の軽減や返済を求める運動がはじまった。農民たちは山林で集会を開いて組織づくりをすすめ、高利貸しと集団で交渉しつつ、郡役所に請願を行ったが、期待した成果を上げることはできなかったのである。こうした状況の中で、指導者たちは武力蜂起の方針に傾斜していったのである。この年の11月1日、田代栄助をリーダーとして、約1000名の農民達は蜂起して高利貸しを襲撃した。また郡役所、警察署を占拠したが、警察、軍隊、憲兵隊が総動員され、鎮圧されてしまった。一部の農民は山を越えて群馬県に進み、更に長野県や山梨県の八ヶ岳へ逃げたものの、捕らえられ、秩父事件は最終的に終末を迎えた。

11月14日、指導者の田代栄助は潜伏先で逮捕された。この蜂起による逮捕自首者は360名となり、田代を含む7名が死刑判決を受けている。1884年（明治17）をピークとして、免債を抱えた農民の運動は東日本を中心として、各地で相次いで発生していた。これらを総称して、「免債農民騒擾」と呼ばれている。厚木歴史研究会では秩父事件らの悲劇を講演会でアピールしています。